

初参加と発表時の思い出

小塚良孝

本学会には、博士前期課程（名古屋大学大学院人間情報学研究科）入学後の第 12 回全国大会（1996 年、同志社大学）から参加しています。その大会では、「Tauno F. Mustanoja（1960）再考—A New Middle English Syntax への試み」と題されたシンポジウム（大泉昭夫先生司会）がございましたが、ちょうどこの大会の前に *A Middle English Syntax* を運良く購入し、読み進めていたところでしたので、初学者ながらそのシンポジウムには心躍らせて参加したことを思い出します。ちなみに、このとき入手した *A Middle English Syntax* は、名古屋の古書店で 3,500 円という破格の値で売りに出されていたものでした。当時、名古屋大学にてご指導頂いておりました中尾祐治先生が、この貴重な情報を授業中に教えて下さいました。これほどの廉価ではきっとすぐに売れてしまうとお話を伺い、授業が終わるや、慌てて買いに走った記憶があります。今でもこの *A Middle English Syntax* を見る度、店が価格の桁を間違えていたのではないかと思います。

初めて参加したときのことでは、書店の展示も強く印象に残っています。当時、まだ北沢書店のような品数豊富な書店に足を運んだことがありませんでしたので、商品としての中世英語関係専門書がずらりと並ぶ光景を目にするのは初めてのことであり、圧巻でした。以来、書店の展示は本学会に参加する楽しみの一つとなっています。

さて、初参加の第 12 回全国大会以降、諸先生方のご発表を拝聴するにつけ、自分がこの場で発表するのは当分先のことだと思っておりましたが、博士後期課程在籍時（大阪大学大学院言語文化研究科）関西大学で開催された第 16 回全国大会（2000 年）にて、幸いにも発表の機会を得ることができました。拙論のタイトルは「*West Saxon Gospels* におけるヨハネ伝の特異性—Authorship 再考」でした。発表が決定してからというもの、嬉しい反面、これが全国規模の学会での初めての発表でしたので、臆病気質も手伝い、戦々恐々となりました。壇上で呆然と立ち尽くす姿を夢に見て、目覚めの悪いこともしばしばでした。

この不安のためというわけではないのですが、運悪く、この年の夏に体調を崩してしまい、長期の入院を強いられました。ただでさえ追い詰められていたところに、病気により追い討ちをかけられ、余計に不安が募りました。数日後に入院を控えたある日、事情をお伝えしておこうと、大阪大学でご指導頂いておりました渡辺秀樹先生の研究室に伺いました。入院の事情を申し上げるだけのつもりが、思わず、発表に対する不安を吐露してしまったように思います。先生は、まあしばらくはゆっくり休みなさいと、専門書ではない本を数冊、おもむろに書棚から取り出され、渡して下さいました。

病院に入ると生活は何かと制限されましたが、一日中ベッドの上にいるだけの、時間的には非常にゆとりのある生活でしたので、治療が一段落し体力が回復してくると、論文、テキスト、辞書、パソコンと次々に病室に勉強道具を持ち込み、少しずつ、気まま

に発表の準備を進めました。

今思うと、おかしな話ですが、発表前のこの入院によって随分と気が楽になったように思います。最初の動揺が嘘のように、落ち着いて12月の発表当日を迎えることが出来ました。また、この病気では多くの先生方に大変ご心配をおかけし、助けて頂きました。そのお陰で、これを乗り越え、発表まで辿り着くことができました。大変有り難いことでした。